

石崎地区遺跡群

曲り田周辺遺跡 II

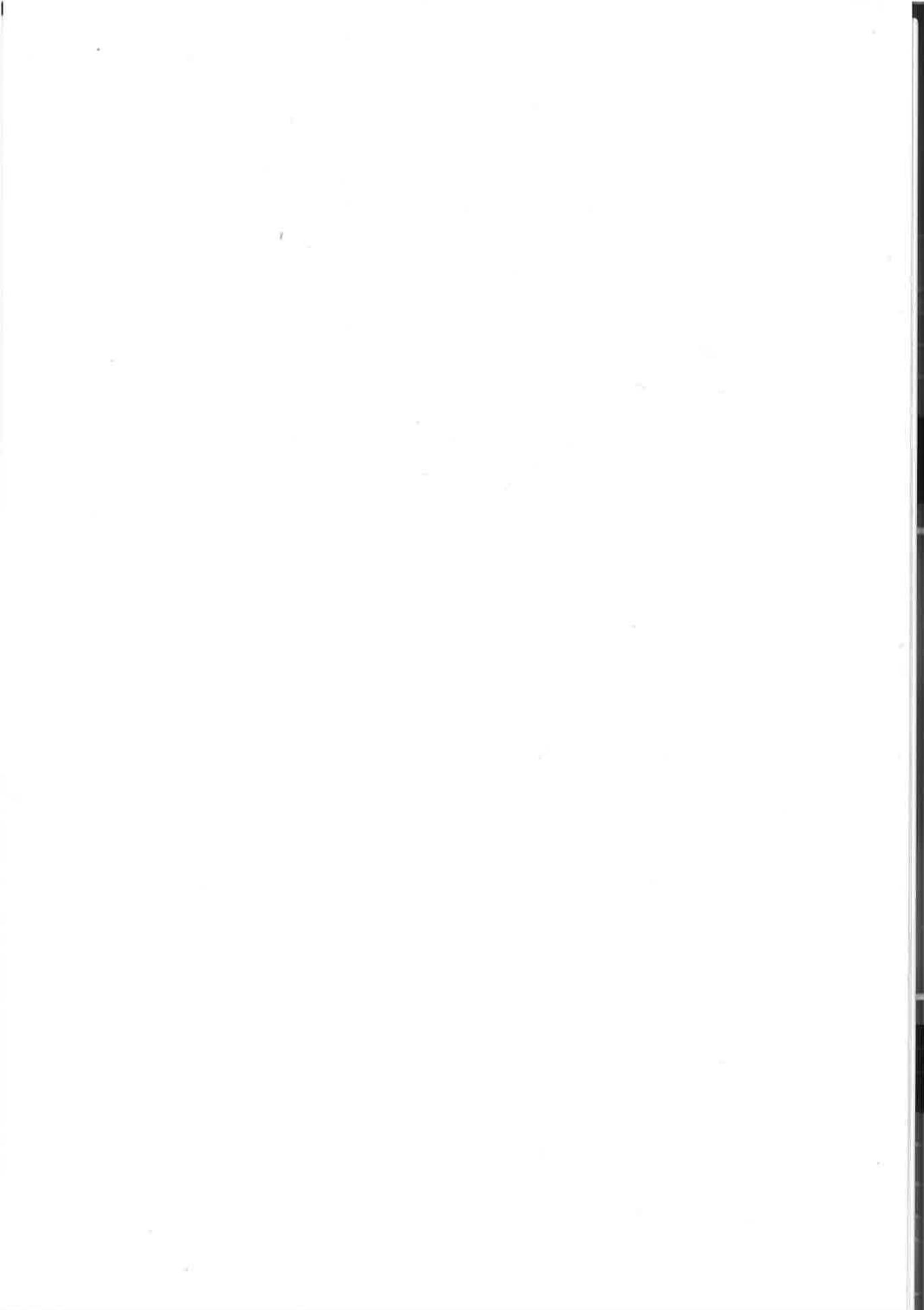
—福岡県糸島郡二丈町大字石崎字金江所在遺跡の調査報告—

二丈町文化財調査報告書

第 5 集

1 9 9 2

二丈町教育委員会



石崎地区遺跡群

曲り田周辺遺跡 II

—福岡県糸島郡二丈町大字石崎字金江所在遺跡の調査報告—

二丈町文化財調査報告書

第 5 集

1 9 9 2

二丈町教育委員会

序 文

曲り田歴史スポーツ公園建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和62年度から始まり、平成3年度をもって、5年間にわたる調査を終了いたしました。

この報告書は、平成元年度に実施した石崎字金江地区の発掘調査の記録であり、「曲り田周辺遺跡Ⅰ」に続くものであります。

遺跡は、稻作開始期の集落遺跡として著名な石崎・曲り田遺跡に隣接しており、又、南北1.0kmにおよぶ石崎丘陵全域とその周辺に遺跡が広がっている事が確認されています。遺跡の性格についても弥生時代の他にも奈良～平安時代にかけて、大規模な官営施設の存在が窺う事ができ、興味深いものがあります。

これらの新しい資料は、二丈町のみならず、糸島地方の古代史を解明する上で貴重なものとなり得ましょう。

本書が、考古学研究や教育の一助となり、広く市民に活用いただければ幸甚に存じます。

平成4年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 吉 村 昌 幸

例　　言

1. 本書は、福岡県糸島郡二丈町大字石崎字金江 280 番地に所在する埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国、県費補助を受け、二丈町教育委員会が行なった。
3. 調査期間は、平成元年 9 月 27 日より平成元年 12 月 27 日までである。
4. 遺構実測は、古川、村上 敦（奈良大学・現二丈町教育委員会）、藤井太郎（同・現神戸市教育委員会）、板野 史（奈良大学）、小池香津江（同）が行ない、遺構写真撮影は、古川、村上が行った。
5. 遺跡全景写真は、空中写真企画に委託した。
6. 出土遺物の実測は、古川が行ない、遺物写真撮影は古川が行なった。
7. 本書の執筆ならびに編集は、古川が行なった。

本　文　目　次

I . はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
II . 遺跡の位置と環境	4
III . 調査の記録	7
1. 概概　要要	7
2. 弥生時代の遺構	7
3. 歴史時代の遺構	12
IV . ま　と　め	24

挿 図 目 次

第1図	丘陵地形図	(折り込み)
第2図	位置図 (S=1/50,000)	2
第3図	周辺地形図 (S=1/2,500)	3
第4図	丘陵全景	4
第5図	内田氏宅支石墓上石	4
第6図	石崎周辺早・前期墓分布図	5
第7図	石崎矢風遺跡1号支石墓	6
第8図	五久遺跡より長石丘陵	6
第9図	石鍶出土ピット実測図 (S=1/60)	7
第10図	谷状遺構出土土器実測図	7
第11図	谷状遺構実測図 (S=1/100)	8
第12図	谷状遺構出土打製石鍶実測図 (S=1/2)	9
第13図	谷状遺構出土石器実測図 (S=1/3)	10
第14図	1号住居跡実測図 (S=1/60)	12
第15図	2号住居跡実測図 (S=1/60)	12
第16図	3号住居跡実測図 (S=1/60)	13
第17図	4号住居跡実測図 (S=1/60)	13
第18図	5、10号住居跡実測図 (S=1/60)	14
第19図	6号住居跡実測図 (S=1/60)	14
第20図	7号住居跡実測図 (S=1/60)	15
第21図	8、9号住居跡実測図 (S=1/60)	16
第22図	3号住居出土土器実測図 (S=1/3)	17
第23図	4号住居出土土器実測図 (S=1/3)	17
第24図	5号住居出土土器実測図 (S=1/3)	17
第25図	6号住居出土土器実測図 (S=1/3)	18
第26図	7号住居出土土器実測図 (S=1/3)	18
第27図	8、9号住居出土土器実測図 (S=1/3)	19
第28図	10号住居出土土器実測図 (S=1/3)	19
第29図	中央客土面出土土器実測図 (S=1/3)	21
第30図	包含層出土土器実測図 (S=1/3)	23
第31図	青灰色粘質土包含層出土石器実測図 (S=1/3)	24

図 版 目 次

- 図版－1 遺跡全景
- 図版－2 谷状遺構全景（真上から）
- 図版－3
(1)谷状遺構全景（西側より）
(2)ピット内石鎚出土状況
- 図版－4
(1)遺跡全景（北側より）
(2)住居群全景（真上から）
- 図版－5
(1)1、2、3、4、5、6、10号住居
(2)4、5、6、7、8、9、10号住居
- 図版－6 谷状遺構出土遺物
- 図版－7 住居跡出土土器
- 図版－8 中央客土面出土土器
- 図版－9 包含層・青灰色粘質土出土土器

I. はじめに

1. 調査に至る経過

近年、福岡都市圏の人口増加は著しく、宅地開発の件数は増加の一途をたどっている。二丈町でも、ここ数年、宅地の開発が急増しており、又、リゾート開発の波のあおりを受けて、マンション計画が後をたつ事もなく、横ばい状態であった人口が増え始めている。こうした状況の中、町民の憩いの場として、昭和62年に計画されたのが、「曲り田歴史スポーツ公園」であり、野球場、公園を中心とした34,000m²と言う敷地面積となる。これと同時に、町財政の切りふだとして、数年来、施策として進めている工場透致の計画がなされ、丘陵の1/3を占める面積が開発される計画となった。しかしながら、同建設予定場である石崎丘陵は、全域が遺跡と言え、昭和51年には、「石崎・曲り田遺跡」が調査されて、稻作開始期の住居を始め、貴重な遺物が出土している事もあり、県文化課、教育事務所、町当局、町教育委員会とで、遺跡の保存か開発かの協議が重ねられた。結果的には、公園部分の調査を昭和62年度より町教育委員会が主体となり開始し、工場については、別の場所に透致する運びとなった。又、遺構についても、調査後、客土を行い、大部分とは言えないものの保存の形がとれ、記録保存の部分を最小限におさえることで合意に達した。

本報告書は、平成元年度に実施した字金江分である。

2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書作成に従事した組織の構成は以下に記すとおりである。

調査主体 二丈町教育委員会

総 括 教 育 長 永田 静夫（平成2年9月まで）

吉村 昌幸（平成2年10月より）

教育課課長 鬼島 利隆（平成2年3月まで）

庄島 正（平成2年4月より）

庶 務 社会教育係長 松崎 栄三（平成3年4月より教育課課長補佐）

同和教育係長 宮崎 晶之

調 査 教育課主事 古川 秀幸

調査指導 福岡県教育庁福岡教育事務所 橋口 達也、

小池 史哲

調査・整理作業 古川智恵子、内田扶美子、内田京子、内田美智子、内田マツヨ、

田中靖子、田中ミヨ子、田中和子、田中栄一、中原ノミ、松村マサ子、浦田マチコ、

浦田アキノ、山田稚恵、木下文子、古藤紀子、山崎聰美、加茂織江



第2図 位置図 ($S = 1/50,000$)



第3図 周辺地形図 ($S = 1/2,500$)

II. 遺跡の位置と環境

曲り田周辺遺跡の立地する石崎丘陵は、南北1.0km、東西0.3kmの馬の背状の独立低丘陵であり、広大な後背湿地をもつ、稻作受容の最適地と言える。

昭和51年、弥生早期の集落が、福岡県教育委員会により調査され、多大なる成果を得た。（石崎・曲り田遺跡）^{註-1}遺跡は、丘陵鞍部、南西斜面に広がっており、早期の住居30軒が検出された。又、小形の支石墓、前期の甕棺基（橋口編年、KⅠa～Ib）も同時に調査され、墓域の範囲も確認されている。

その後の調査でも稻作開始期の遺構が、丘陵周辺に連続的に拡散している事が判明しつつあり、弥生時代の開始期からその広がりを考える上で、学術的にみても重要な地区と言えよう。ここで、墓群の範囲について若干の類例を紹介しておきたい。

昭和20年頃、丘陵鞍部東側、石崎字坂本（通称石町）において花崗岩の大石が発見されている。現在、内田農蔵氏宅の庭石に使用されているもの（第5図参照）で、地主である内田氏によると大石の下にも支石と考えられる石があり、周辺に若干の土器の散布が認められたとしている。支石墓として即断できないものの、曲り田遺跡より250mの位置で、丘陵東側のテラス面という立地からみても可能性は高い。大石は、現況で長軸240cm、短軸160cmを計る花崗岩である。今後、当地区的調査に期待がもてよう。次に昭和62年より一貴山地区遺跡群として実施された、県営は場整備事業に伴う調査において、丘陵南東、石崎字大坪にて3グループ、23基の甕棺（KⅠa～KⅠb）が調査されている。遺跡は、丘陵を見上げる場所に位置し、遺構面は、青灰色シルト層であった。又、墓群の他にも住居、旧河川、井堰等も確認されている。時期的には前期初頭であるが近隣に早期の遺構も期待できる。

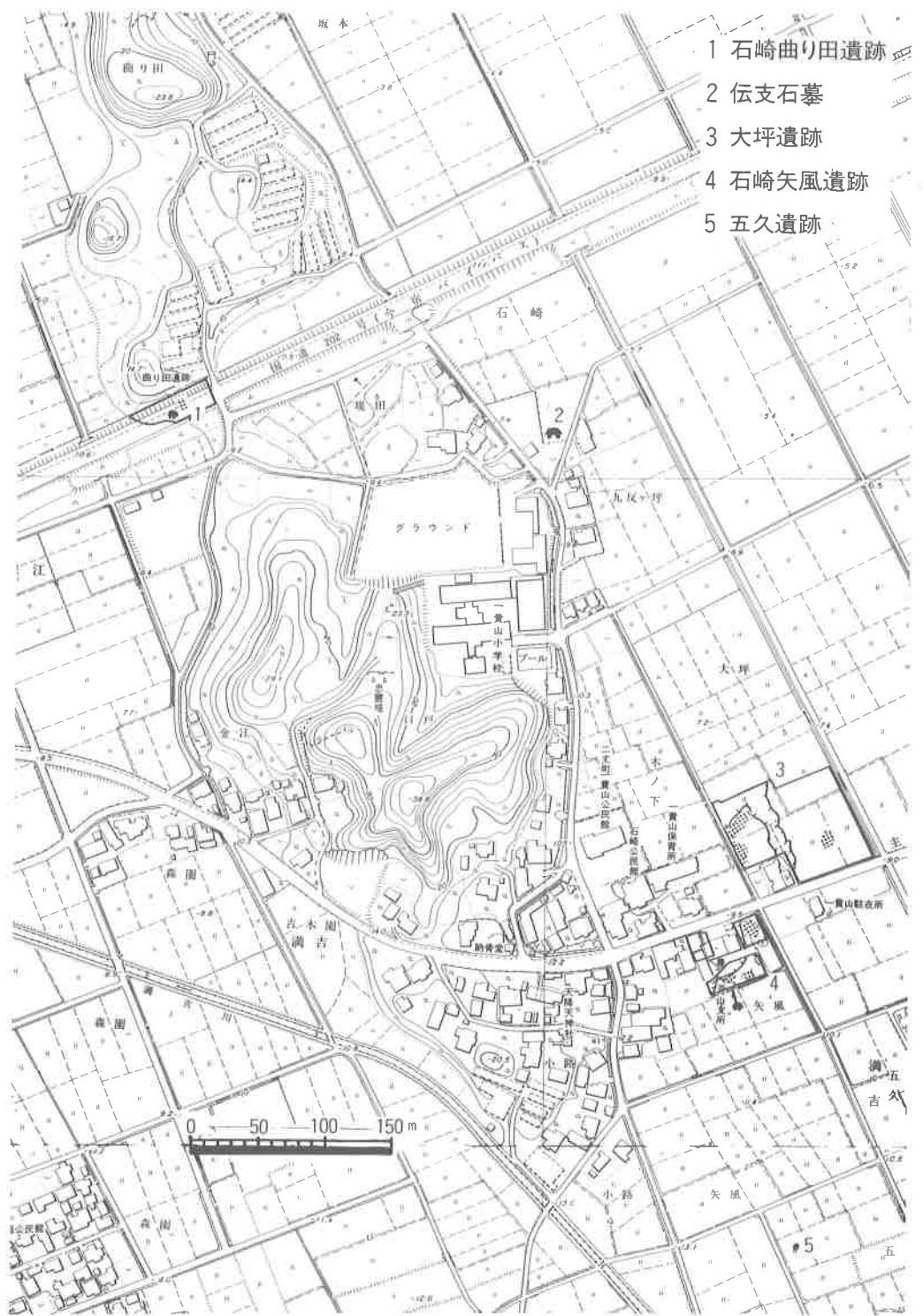
前述、大坪地区の墓群の続きとして注目されるものに石崎・矢風遺跡がある。同遺跡は、平成元年度に実施した郡農協支所建て替えに伴う緊急調査であり、50基もの墳墓が確認された。



第4図 石崎丘陵全景



第5図 内田氏宅支石墓上石



第6図 石崎周辺早・前期墳墓分布図

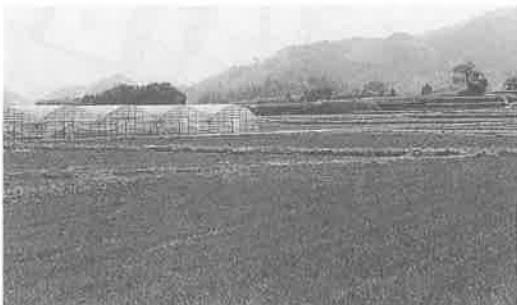
矢風遺跡の墓の構成は、支石墓4基、甕棺墓40基、木棺墓5基、土壙墓1基からなり、4グループを形成していた。時期は甕棺の形態から板付II式期(KIa～IIb)といえるが、小郡市、三國鼻遺跡、福岡市、田村遺跡にみられる板付I式期の範中に含まれるものも数基入っている。
註-2 註-3

支石墓(第7図参照)は、蓋式、基盤式があり、主体部も木棺、(1号支石墓)、甕棺(2～4号)の二通りが確認された。旧状を保っていたものは1号支石墓(第7図)のみで、上石は、長軸150cm、短軸100cmの長惰円形、材質は花崗岩で、5個の支石で支えられていた。主体部は木棺で、棺底に頭骨片が残っていた。時期は、板付II式期である。2～4号は、旧状はとどめていないものの比較的残りはよく、主体は甕棺(KIa～Ib)である。3号の主体には重孤文の彩文が施されていた。

糸島地方にみる支石墓は、弥生早期～前期(板付II式)にわたり、主体部も木棺、甕棺、石室状のものと多様である。墓群の構成については、支石墓が主体を占めるもの(新町、志登)、甕棺等と共存するもの(宮の前、用会、石ヶ崎、
註-6 註-7 註-8矢風)、単独又は少数で存在するもの(小田、曲り田)
註-9とに分かれる。曲り田、宮の前と弥生早期も存在するが、大多数は前期(板付I～II式)に含まれ、島原半島、佐賀平野、唐津平野よりはやや後出の様相を呈している。しかしながら稻作開始期の遺跡の広がりを考えてもまとまった早期の支石墓が出土する可能性は高く、今後、石崎丘陵の周辺地域における慎重な調査を期したい。



第7図 矢風遺跡1号支石墓



第8図 五久地区遠景

前述の可能性として、矢風の北側、二丈町大字満吉字五久について若干ふれておきたい。同地区は、昭和15年に丹塗り磨研の壺棺が出土し、『五久遺跡』として周知されている。
註-11状況から早期のものであろうが、矢風遺跡と同一台地上で、一時期古い墳墓が存在している事は、興味深い事である。

満吉字五久から石崎字矢風にかけて、もうひとつの集落が存在し、又、一時期古い早期の集落の存在もありえるであろう。

III. 調査の記録

1. 概要

調査地は、石崎丘陵西側斜面、字金江地区3,500m²である。丘陵中央から南側へは階段状にカットされ、遺構の残りは期待できなかったが、北側は旧状をとどめており、昭和56年調査地点（石崎・曲り田遺跡）へと続く事等から弥生前期～平安期の遺構の存在が予測できた。

調査は、重機による表土除去を行い、遺構検出を南側より開始した。南側は弥生～前期の遺物を包含する谷状遺構と若干のピットを検出したのみで、ほとんど遺構はなく、北側斜面より、平安期の住居を検出した。又、裾部は、青灰色粘質土の包含層を形成していた。

2. 弥生時代の遺構

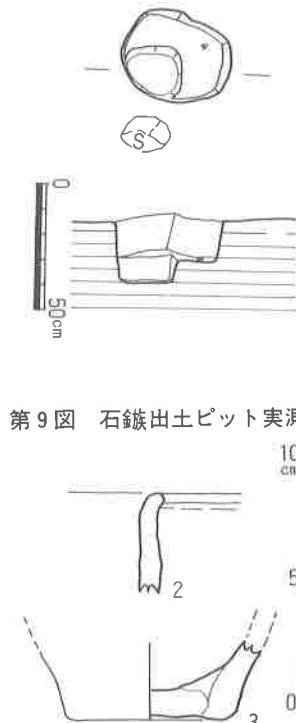
1) 谷状遺構（第11図 図版-2）

調査区南隅に形成された谷状遺構で、表土以下、黒色土（包含層）、暗黄褐色土（包含層）の堆積があり、暗褐色の遺構面となる。包含層出土遺物は、土器、石器伴に小量であるが、弥生前期にかかるもののみであり、丘陵上に稻作開始期の遺構が存在したのであろう。

2) 石鎌出土ピット（第9図 図版-3）

谷部中段で検出した44×35cmの二段堀りピットで、中段よりサヌカイト製の打製石鎌（第12図-8、図版-6）が出土した。谷部肩、遺構面上のピット同様に柱穴となるかは不明である。又、ピットの時期も出土土器がなく、石鎌自体流れ込みの可能性もある。

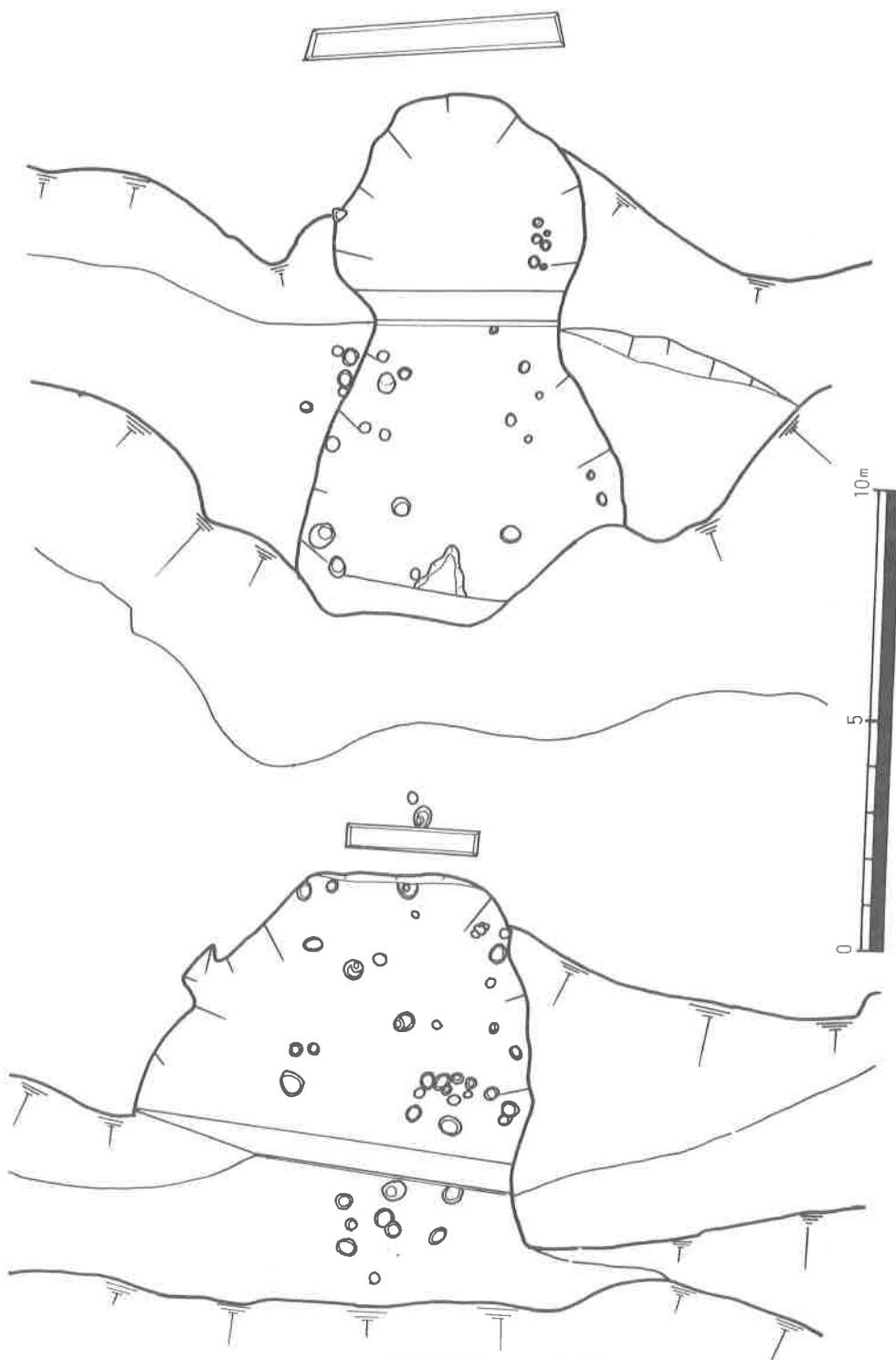
3) 谷状遺構出土土器（第10図、図版-6）



第9図 石鎌出土ピット実測図

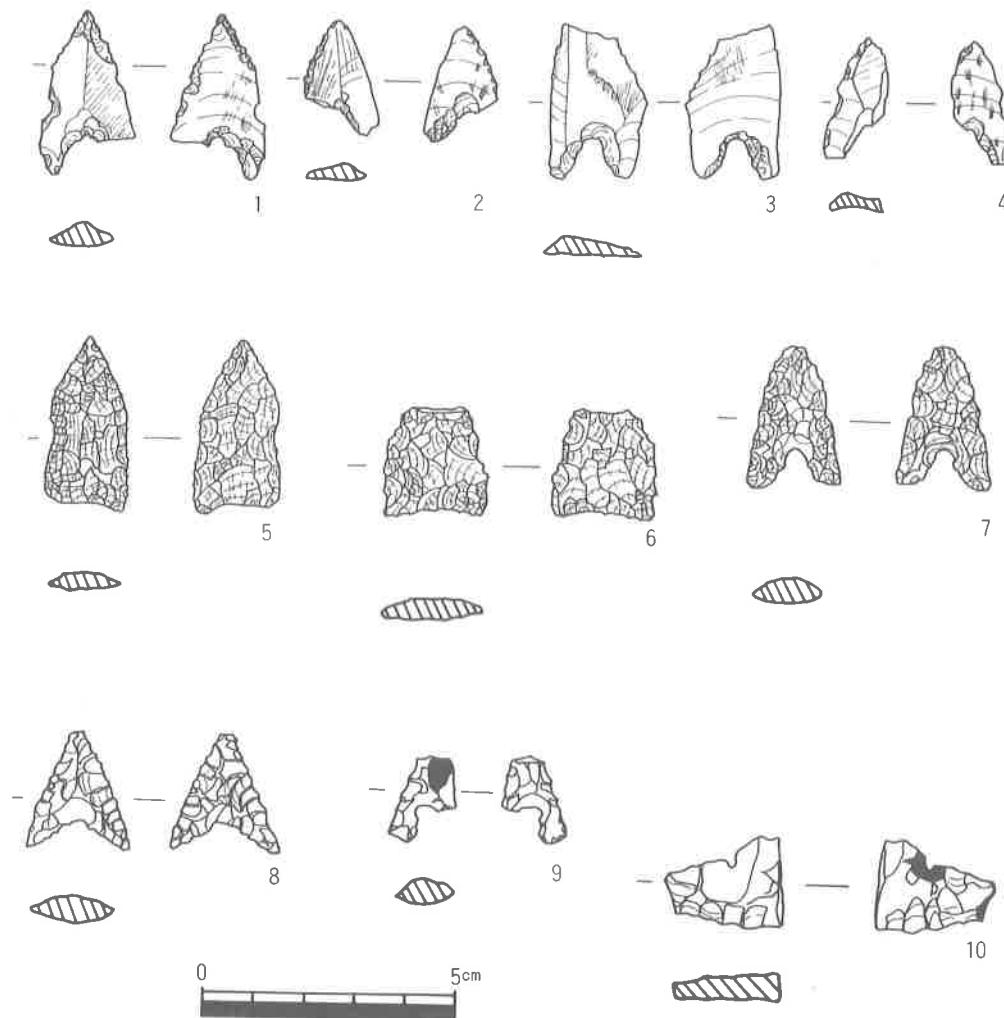


第10図 谷状遺構出土 弥生土器実測図 (S=1/3)



第11図 谷状遺構測量図 ($S=1/150$)

1～3は上層（黒色土）出土土器であり、1は、あまり張らない胴部から外側へ屈曲する口緑を有す甕である。口径23.2cm、現高8.5cmを測り、口緑外端に刻目を施し、調整は内外面ナデ調整である。色調は希桃色～黒褐色を呈し、胎土に白色微砂粒を含む。焼成はやや不良である。2は、わずかに外反する程度の甕口緑片である。口緑端には刻目がなく、丸く仕上げている。色調は黒色を呈し、白色砂粒を多く含み、焼成は不良。3は、甕の底部片であり、周緑部のみが接地し、上げ底気味になる。色調は褐色で、粗い砂粒を多く含み、焼成は良好である。4、5は下層（暗黄褐色土）出土土器であり、4は、肩で屈曲するタイプの甕であろう。水平に近い口緑端と口緑直下の凸帯に太めの刻目を施す。内面に横方向への擦過を施し、色調は赤褐色（口緑端、凸帯は黒色）、粗い砂を多く含み、焼成はやや不良。5は、やや直立する甕の



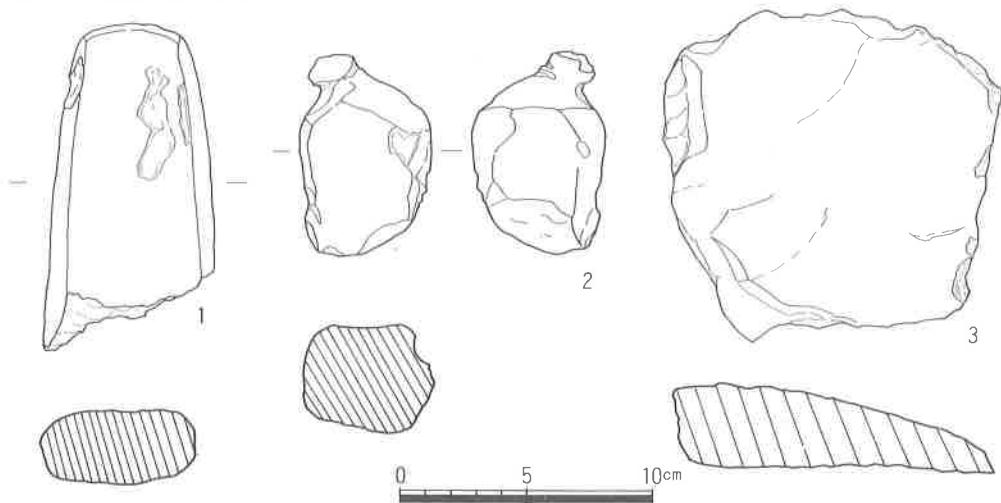
第12図 谷状遺構出土 打製石鏃実測図 (S=2/3)

口縁片で、口縁直下に太めの刻目を施す凸帯を有す。器表は剥落が著しいが、外面に横方向の擦過を施している。色調は暗褐色、白色微砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

4) 谷状遺構出土打製石鎌（第12図、図版-6）

1～4は上層、5～7、9、10は下層、8はピット出土の打製石器である。

1～4は凹基式の剥片鎌で、いずれも黒曜石製である。1は、現長33mm、幅18mm、厚さ5mm、重さ1.6gを計る。2は、現長23mm、幅13mm、厚さ3.5mm、重さ0.6g、3は、現長30mm、幅19mm、厚さ3.5mm、重さ1.8g、4は、現長23mm、幅9mm、厚さ3.5mm、重さ0.6gを計る。5、6は黒曜石製の平基式、7は凹基式の鎌であり、表面は、丁寧に加工している。5は、現長35mm、幅17mm、厚さ3.5mm、重さ1.9g、6は、鋒先部を欠損し、現長21mm、幅20mm、厚さ4mm、重さ1.5g、7は現長28mm、19mm、厚さ5mm、重さ2.2gを計る。8は、安山岩製の凹基式鎌で、ピット（第9図参照）出土である。現長23mm、幅20mm、厚さ5mm、重さ1.3gを計り、表面は丁寧に加工している。9は、安山岩製の凹基式鎌、現長17mm、幅12mm、厚さ5.5mm、重さ0.8gを計る。10は、半分欠損しているが、石匙であろう。現長18mm、幅23mm、厚さ5.5mmを計り、表面は雑に加工してある。安山岩製である。



第13図 谷部出土石器実測図 ($S = 1/3$)

5) 谷状遺構出土磨製石器（第13図、図版-6）

1は、淡灰白色の珪質シルト岩製の磨製石斧である。現長11.7cm、幅6.4cm、厚さ2.8cmを測る。表面はかなり風化しており、表・裏両面に研磨状況は明らかではない。2は、磨製穿孔具であり、やや粗い粒子の砂岩製である。表面は風化が激しいが、中央部には整形時の面取りが残る。磨耗基部は主軸からはずれて上下2箇所に付いている。現長8.0cm、最大幅5.1cm、厚さ4.0cm、磨耗基部の径は1.8cm、2.0cmを測る。3は淡灰白色の珪質シルト岩の塊であり、表面は磨かれ

ているものの、裏面は打割面のままである。石斧製作途中のものであろうか。現長12.4cm、幅12.0cm、厚さ3.2cmを測る。

6) 小 結

同遺跡中では、弥生早、前期の明確な遺構はとらえられなかった。しかしながら青灰色粘質土下の磨製石斧（第31図、図版－8）や南側谷部の包含層出土の石器群の状況からみても開墾により削平を受けている丘陵上に早・前期の遺構が存在していた可能性は高い。又、調査区西側から調査区外へとのびる青灰色粘質土下には、弥生前期の水田遺構が期待され、調査時中、重機によるトレンチ調査を行ったが、調査区内での確認はできなかった。今後、石崎丘陵周辺の水田遺構の検出と広がりを確認する課題が残ったと言えよう。

3. 歴史時代の遺構

1) 概 要

調査地、北側隅、西斜面に10棟の方形、隅丸方形の住居が検出された。住居は重複が激しく全容を確認し得た遺構はないが、一辺350cm程のものから650cm程の規模である。又、竈の付設は確認されなかつたが、7号住居跡焼土付近より移動式竈が出土している。

2) 竪穴式住居

1号住居跡（第14図）

大半が、調査区外であり、3号住居跡とも重複しており、北東隅しか残っていない。隅丸方形住居と考えられるが、全容は把握できない。南隅のピットは主柱穴であろう。

2号住居跡（第15図）

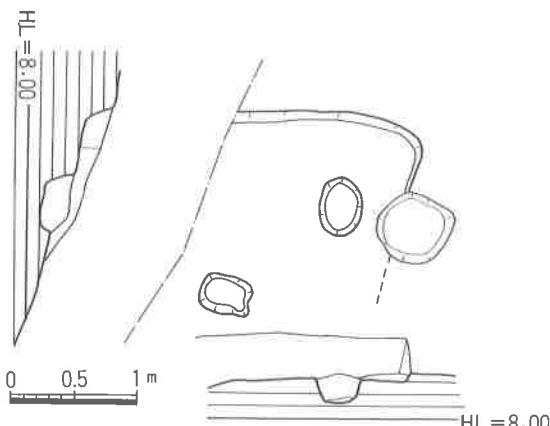
北側は、調査区外となり、斜面築造のため、大部分を流失し、南東隅しか残っていない。隅丸方形住居であろうか。柱穴類は検出できなかった。

3号住居跡（第16図）

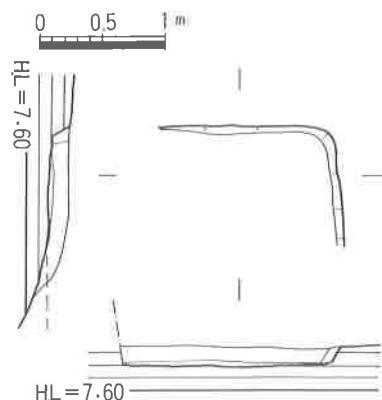
1号、4号住居跡と重複しているが、東半分が残る。これによると、一辺450cm程の隅丸方形住居であろう。壁際に3個のピットが検出され、2間×2間の壇立柱建物の可能性もある。

4号住居跡（第17図）

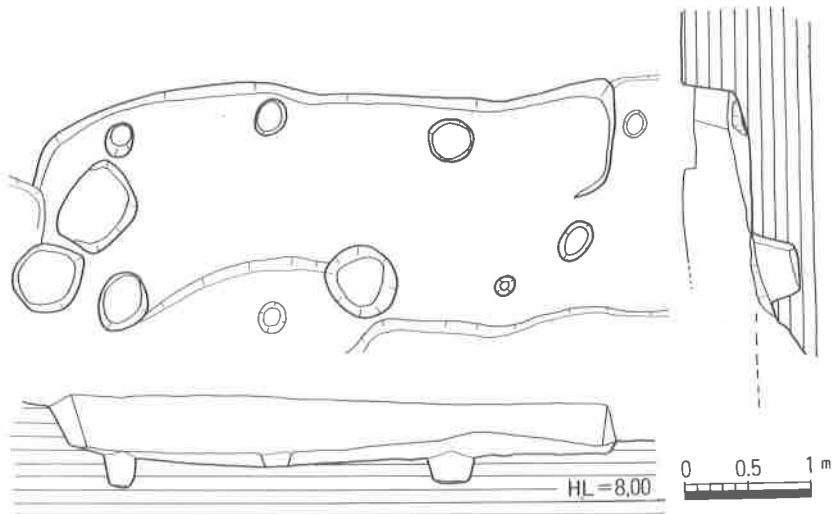
3号、5号、10号住居跡と重複しており、南隅を中心に残っている。一辺360cm程の方形住居であり、8個のピットを検出したが、いずれが主柱穴となるかは不明である。



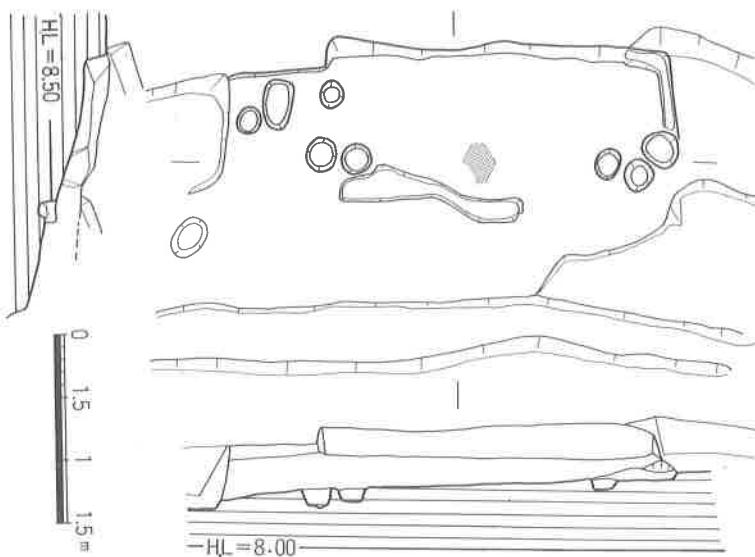
第14図 1号住居跡実測図 ($S = 1/60$)



第15図 2号住居跡実測図 ($S = 1/60$)



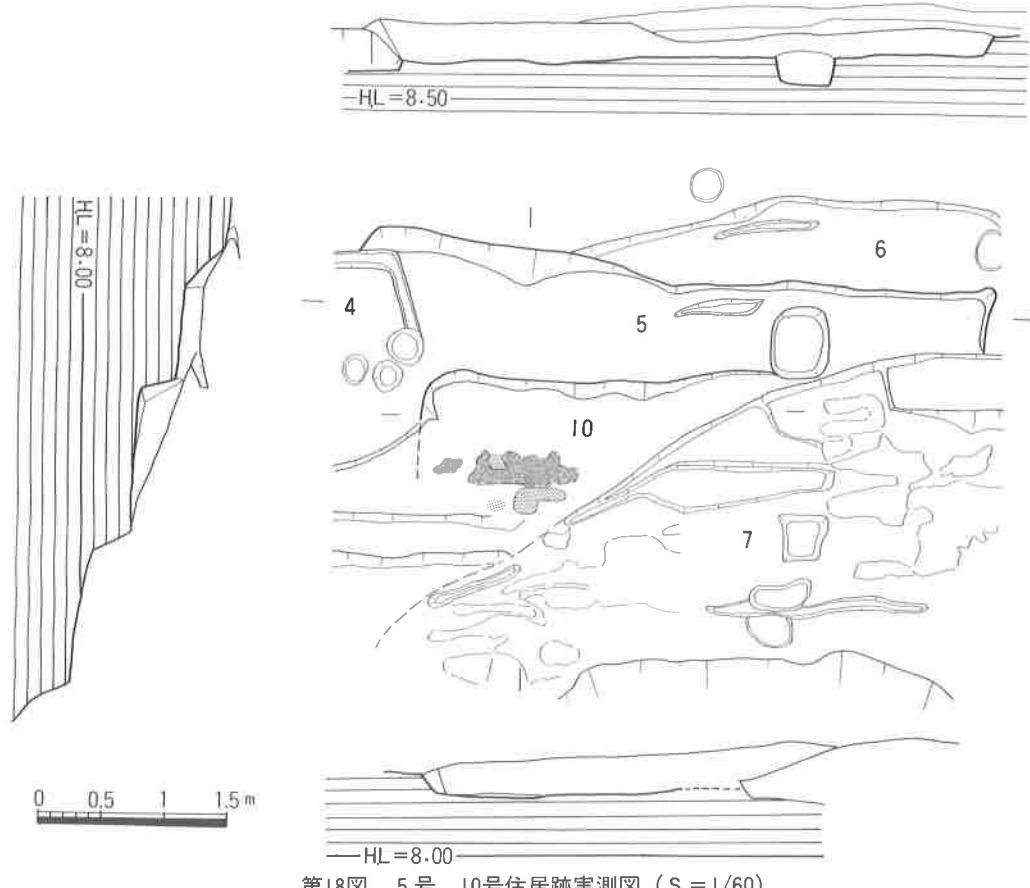
第16図 3号住居跡実測図 ($S = 1/60$)



第17図 4号住居跡実測図 ($S = 1/60$)

5号住居跡（第18図）

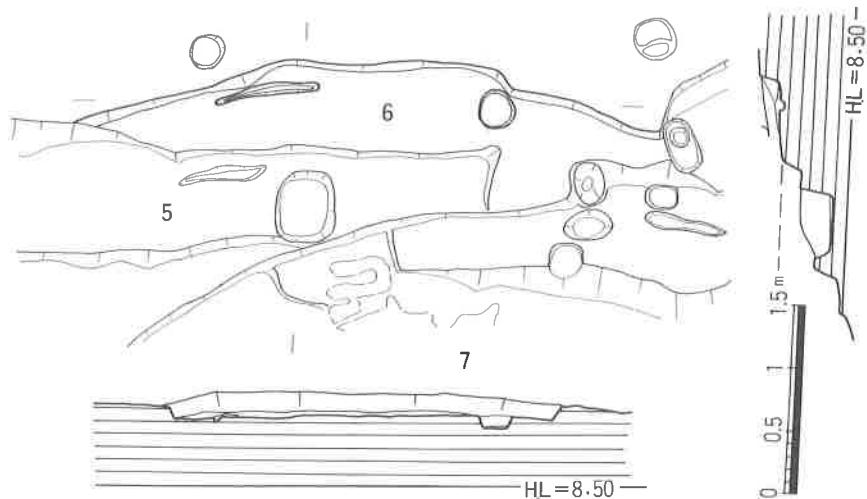
4号、6号、7号、10号住居跡と激しく重複しているが、東半分が残る。それによると一辺500cm位の方形住居跡であろう。壁際には幅14cm位の周壁溝を長さ70cm程検出した。又、中央で60×45cmの土壙を確認したが、性格は不明である。



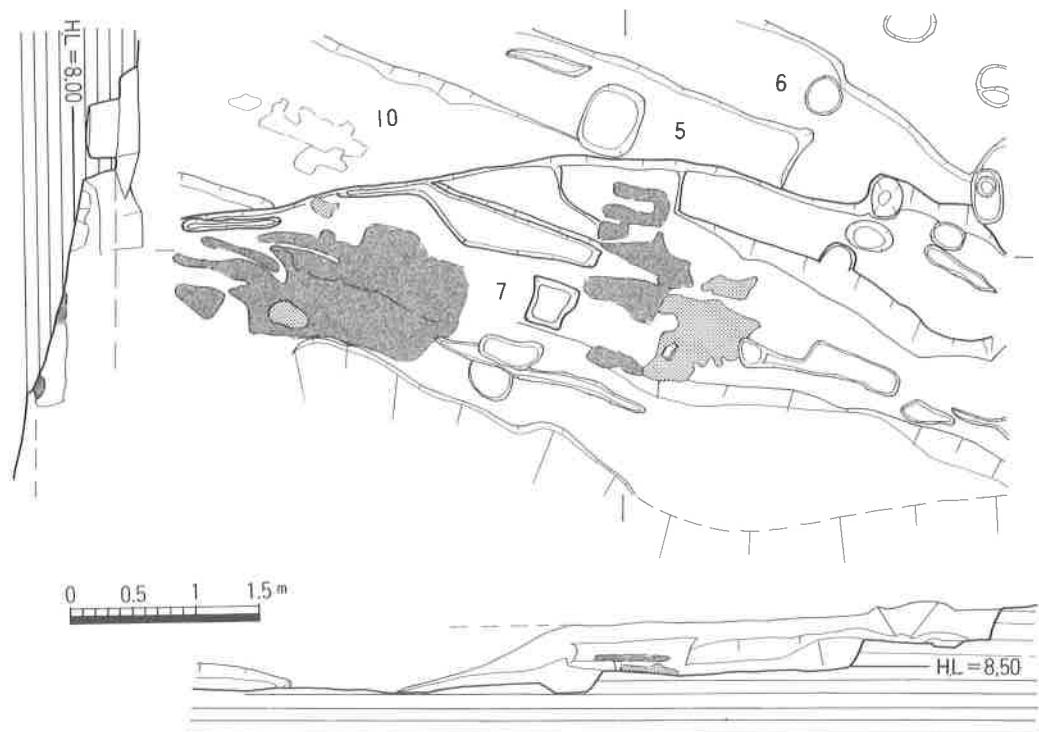
第18図 5号、10号住居跡実測図 ($S = 1/60$)

6号住居跡（第19図）

5号、7号、8号、9号住居と激しく重複しており、東側の一部のみ残存していたため、全容は把握できない。壁際に柱穴状ピット1個と幅10cm位の周壁溝を80cmの長さで検出した。



第19図 6号住居跡実測図 ($S = 1/60$)



第20図 7号住居跡実測図 ($S=1/60$)

7号住居跡（第20図）

5号、10号住居跡を切って、築造されているが、西側が流失しており、東側が残存している。それによると一辺650cm位の隅丸方形住居であろう。無数の柱穴状ピット、溝を検出したが、いずれが主体となるかは不明である。中央付近で焼土（移動式竈出土）、炭を検出した。

8号住居跡（第21図）

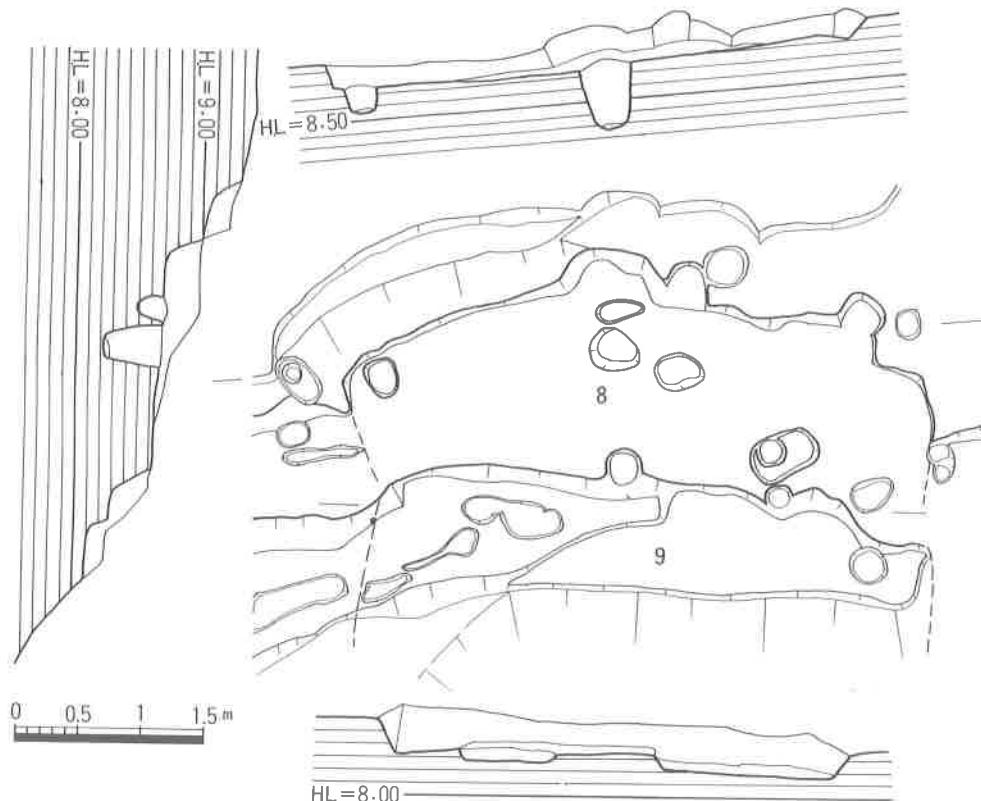
9号住居と重複しており、東側半分が残存している。1辺410cm位の隅丸方形住居であろう。壁際に4個、南東に2個柱穴状ピットを確認したが、主柱穴か否かは不明である。

9号住居跡（第21図）

8号住居を切って築造され、二隅が残る。西側は、弥生前期、後期、奈良～平安の土器を包含する厚い青灰色粘質土となる。一辺440cm位の隅丸方形住居であり、全容は把握できない。

10号住居跡（第18図）

5号、7号住居跡と重複し、北東隅のみが残存する。柱穴状ピット等は確認できなかったが、北側コーナー付近で炭が検出された。



第21図 8号、9号住居跡実測図 ($S = 1/60$)

3) 出土遺物

(1) 3号住居出土土器（第22図、図版-7）

1～3は、須恵器坏である。1は、外反する深い体部に低目の高台を有す。口径14.8cm、底径8.6cm、器高5.3cmを計り、外面は丁寧にナデを施す。色調は灰白色、白色砂粒を含み、焼成は良好である。2は、底部片で、低目の高台を有す。現高1.6cm、底径8.4cmを計り、色調は暗灰色、焼成は良好である。3は、外へ張る大き目の高台を有し、体部は外反する。色調は灰白色、白色砂粒を含み、焼成は良好である。

(2) 4号住居出土土器（第23図 図版-7）

1は土師器甕口縁部片である。口縁内面は、稜をなし、わずかに外反する。現高で、6cmを

計る。口縁内面は削りを施し、肩部内側に指頭圧痕が残る。色調は暗茶色、焼成はややあまい。2は須恵器壺底部片であり、やや外に開く、低い高台を有す。現高1.7cm、底径7.7cmを計り、色調は青灰色、焼成は良好である。

(3) 5号住居出土土器 (第24図、図版-7)

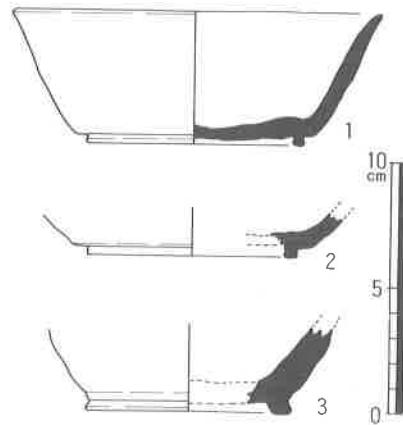
1は、土師器甕口縁部片であり、口縁は稜をもって、外反する。現高5.0cmを計り、色調は黄褐色、焼成はややあまい。2は、焼土内より出土した甕或いは甌の把手であり、器壁に貼り付けている。表面は手捏ね状で面取りされている。内面は上方に削りを施す。色調は黄褐色、胎土は粗い砂粒を含み、焼成は良好である。

(4) 6号住居出土土器 (第25図、図版-7)

1は、土師器甕口縁部片であり、口縁はしまりがなく、わずかに外反する。調整はタテハケ、口縁内面はヨコハケ、体部内面に削りを施す。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。2は、土師器甕底部片であろう。色調は黄褐色、焼成はややあまい。3は、内黒土器であり、高台を有する碗であろう。色調は黄褐色、焼成はややあまい。4は、土師器碗であり、高い高台を有す。色調は乳白色を呈し、焼成は悪い。5は、須恵器甕頸部片であり、器表はタタキの後ヨコナデを施す。色調は灰色で、焼成は良好である。6は須恵器壺底部片で、色調は青灰色、胎土に白色砂粒を含み焼成は良好である。

(5) 7号住居出土土器 (第26図、図版-7)

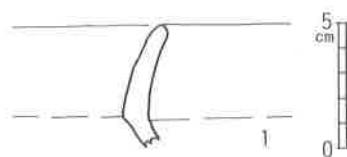
1は、土師器高台付碗底部片で、底径9.7cmを測る。高台は細く、外方へ張り、端部は丸く仕上げている。体部は高台の上に稜をなし、そこから丸くなる。色調は赤褐色、胎土に微砂粒、金雲母を含み、焼成は良好である。2は、須恵器高台付壺底部片で、高台は低く、わずかに外へ張り、体部は外反する。底径8.0cmを測り、色調は青灰色、焼成は良好である。3は、須恵器高台付壺の底部小片で、高台は低く、垂直に付く。底径8.8cmを測り、色調は灰色、焼成は良である。4は、須恵器皿片で、口縁端部は丸く仕上げている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。5は、土師器甕或いは甌の把手部分である。表面は手捏ね状であり、色調は赤褐色、焼成は良



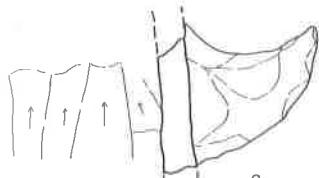
第22図 3号住居跡出土土器 ($S = 1/3$)

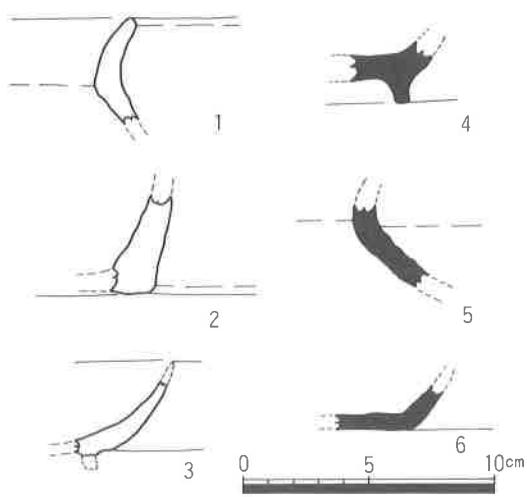


第23図 4号住居跡出土土器 ($S = 1/3$)



第24図 5号住居跡出土土器 ($S = 1/3$)





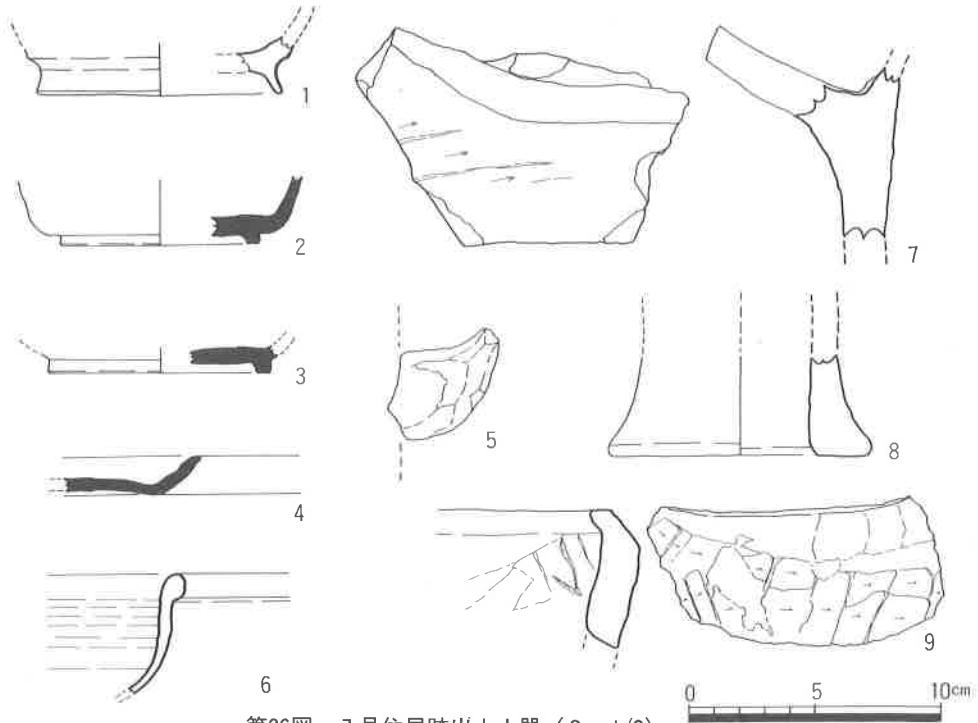
第25図 6号住居跡出土土器 ($S = 1/3$)

好である。6は、白磁の碗であり、口縁は玉縁を有す。見込みに沈線をめぐらせ、胎土は密である。色調は黄白色であり、釉は淡いオリーブ色である。7は、焼土内より出土した物で、土師質で器壁が厚い。移動式竈であろう。内面は横方向へ削り、外面はナデを施す。色調は茶褐色で、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。8は、底径10.4cmを測る器台であり、古墳時代のものであろう。埋土出土であり、流れ込みと考えられる。色調は黄褐色で、焼成はやや不良である。9も埋土出土の滑石製石鍋口縁片である。胴部から外反し、口縁から内側に屈曲、

口縁上端は平坦面をつくる。外面は横方向にノミ調整痕が残り、内面は丁寧に研磨している。

(6) 8号住居出土土器 (第27図、図版-7)

1は、弥生中期の甕口縁片で混入品である。色調は黄褐色、焼成はややもろい。2は、須恵



第26図 7号住居跡出土土器 ($S = 1/3$)

器皿片である。体部は上外方にのび、端部は丸く仕上げている。口径16.5cm、底径12.6cm、器高1.2cmを測る。色調は青灰色を呈し、胎土に白色砂粒を多く含む。焼成は良好である。

(7) 9号住居出土石器

第27図、図版-7)

3は、砂岩製の砥石であり現長7.6cm、幅6.1cm、厚さ5.4cmを測る。

(8) 10号住居

出土土器

(第28図、
図版-7)

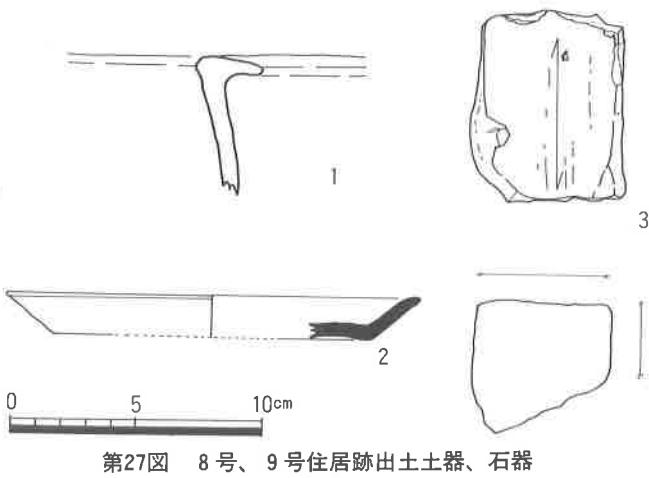
1は、土師器
甕片で、中型品
である。直立氣

味の体部から外側へ屈曲する口縁となる。口縁内側と器表は丁寧にナデ、内面は不定方向への削りを施す。復元口径30.2cm、現高10.5cmを測り、色調は白桃色、胎土に白色砂粒、金雲母を含み、焼成は良好である。

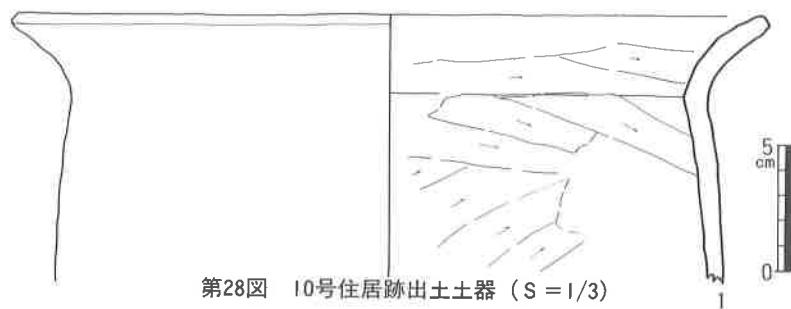
4) 中央客土面、包含層出土土器(第29図、図版-8)

調査区中央部分が谷状地形をなし、中段部分から黄褐色土による客土がなされていた。調査時点では何らかの遺構が予測されたためベルトを残し、下げる始めたが、弥生後期～古墳までの土器が同時に出土し、遺構面は確認されなかった。以下、この客土層出土の土器を説明する。

1は、須恵器蓋口縁片であり、復元口径14.7cm、現高1.6cmを測る。丸くおさめた口縁下端の内側は浅い沈線をなす。扁平な撮みが付くものであろう。体部はヘラ削りを施し、色調は暗灰色、焼成は良好である。2は、丸く仕上げた口縁に扁平の撮みが付く蓋で、口径14.5cm、器高2.2cmを測る。体部はヘラ削りの後ヨコナデ、内側はヨコナデを施す。色調は青灰白色、焼成は良好である。3～11は、須恵器杯身であり、11以外は高台を有す。3は、小さい高台を有し、体部の深い壺である。口径17.5cm、底径10.2cm、器高5.4cmを測り、色調は青灰色、焼成は良好である。



第27図 8号、9号住居跡出土土器、石器

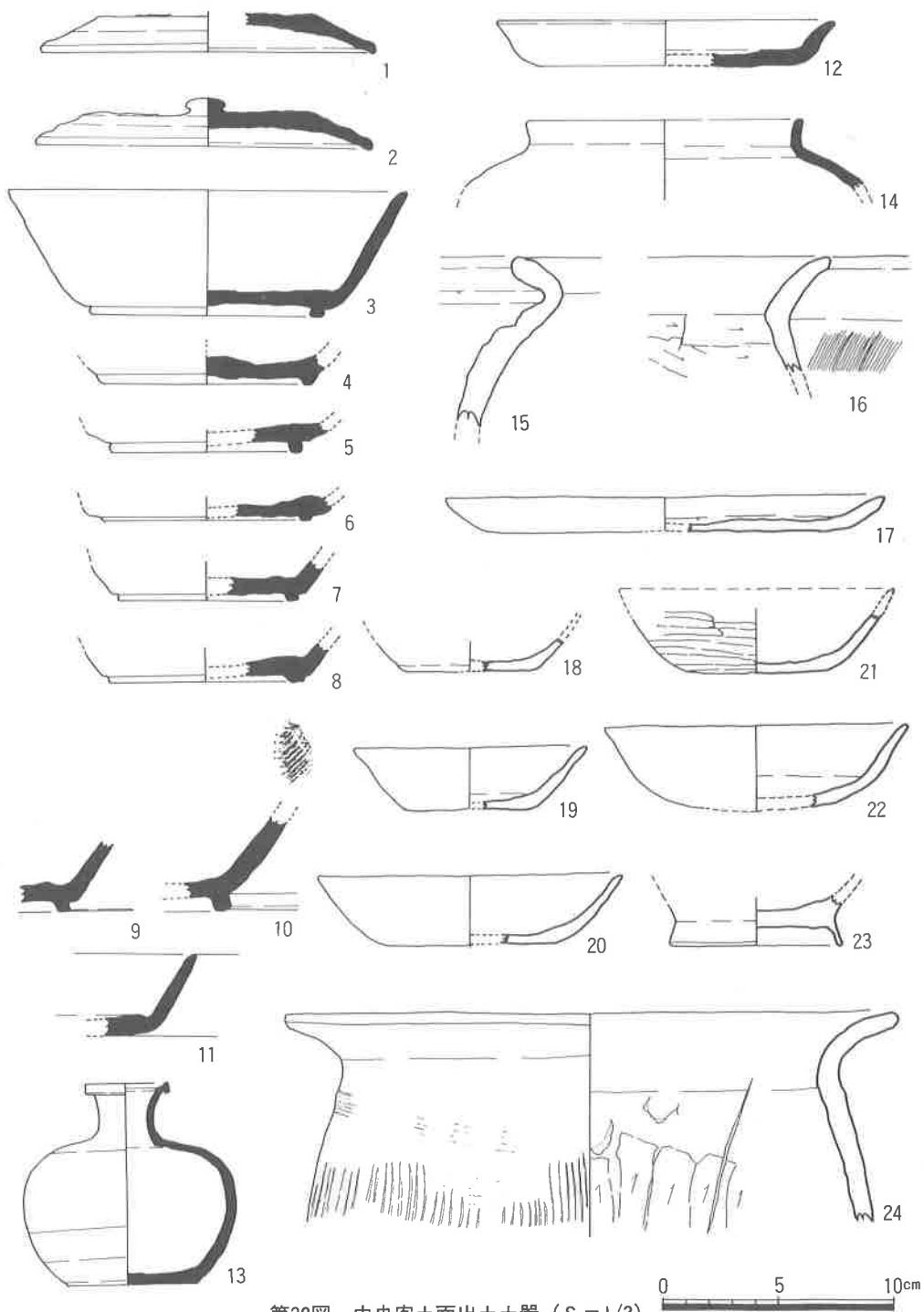


第28図 10号住居跡出土土器 (S=1/3)

る。4は、内傾する低い高台を有し、底径9.2cmを測る。色調は灰白色、焼成は良好である。5は、やや外へ張る高台を有し、底径8.3cm、色調は青灰色。6は、低い高台から丸味をもって、直に立ちあがる体部を有し、底径9.1cm、色調は青灰色である。7は外へ張った低い高台を有し、底径7.8cmを測る。色調は灰白色である。8は低く、小さ目の高台を有し、内端で接地するものである。底径8.4cm、色調は、青灰色である。底部に整形時のヘラ状工具痕が残る。9は外へ張った低い高台を有す底部片であり、色調は暗灰色、10は、外へ張った大き目の高台で、内端で接地する底部片、色調は暗灰色である。11は、高台を持たない須恵器杯底部片で、色調は乳白色、焼成は良である。12は、須恵器皿で口縁は上外方へ開き、端部は丸くおさめている。口径14.6cm、底径12.1cm、器高2.0cmを測り、色調は青灰色、焼成は良好である。13は、小型で、頸部のしまった須恵器短頸壺であり、完形品である。底部は平底で、球状の体部からやや外反気味の短い頸部となる。口縁は外端で面を持ち横ナデ、体部はヘラ削り後丁寧に横ナデを施す。口径3.6cm、底径5.7cm、器高8.7cmを測り、色調は灰白色、焼成は良好である。14は、口径の長い短頸壺口縁片であり、薬壺の類であろうか。口径12cmを測り、色調は暗灰色、焼成は良である。15は、弥生後期の袋状口縁壺片である。色調は黄褐色、外面は丹塗りで、色調は不良である。16は、土師器甕口縁片で、直線的に開く口縁である。体部は外面は、細いハケ目、内面は削りを施す。色調は赤褐色、焼成はやや不良である。17は、土師器盤であり、口径19cm、底径15.5cm、器高1.5cmを測り、色調は赤褐色、焼成は不良である。18～22は、土師器碗であり、18、19はやや小ぶりである。18は、底径5.7cmを測り、色調は赤褐色、焼成は良である。19は、口径10.1cm、底径5.7cm、器高2.7cmを測り、口縁端部は丸くおさめる。色調は暗褐色、焼成は良である。20は、口径13.2cm、底径7.5cm、器高3.0cmを測り、色調は赤褐色、焼成は良である。21は、底径6cmを測り、色調は暗茶色、焼成は良好である。体部外面には横方向のミガキを施す。22は、口径13cm、器高3.7cmを測り、底部は丸く仕上げられている。色調は赤褐色、焼成は良である。23は、土師器高台付碗で、内黒土器である。外へ張る高い高台を有す。底径7.5cmを測り、色調は赤褐色、焼成はやや不良である。24は、土師器甕で口縁は頸部から強く外反する。体部外面は縦方向のハケ目、頸部から強い横ナデを施す。又、頸部下には、横方向の工具痕が残り、板ナデを施した後ナデつけている。内面は縦方向ヘラケズリを施す。口径26.5cm、現高9.6cmを測り、色調は暗茶褐色、焼成は良好である。

5) 包 含 層 (第30図、図版-8)

調査区北側、平安期の住居跡群上に堆積していた黄色土の土器包含層と調査区西側全域に広がる青灰色粘質土の土器包含層で出土した土器群である。北側黄色土については、平安期以降幅広い時期の土器を持ち、青灰色粘質土には、弥生前期の石器群を含み、弥生後期で包含していた。順次説明を加えたい。

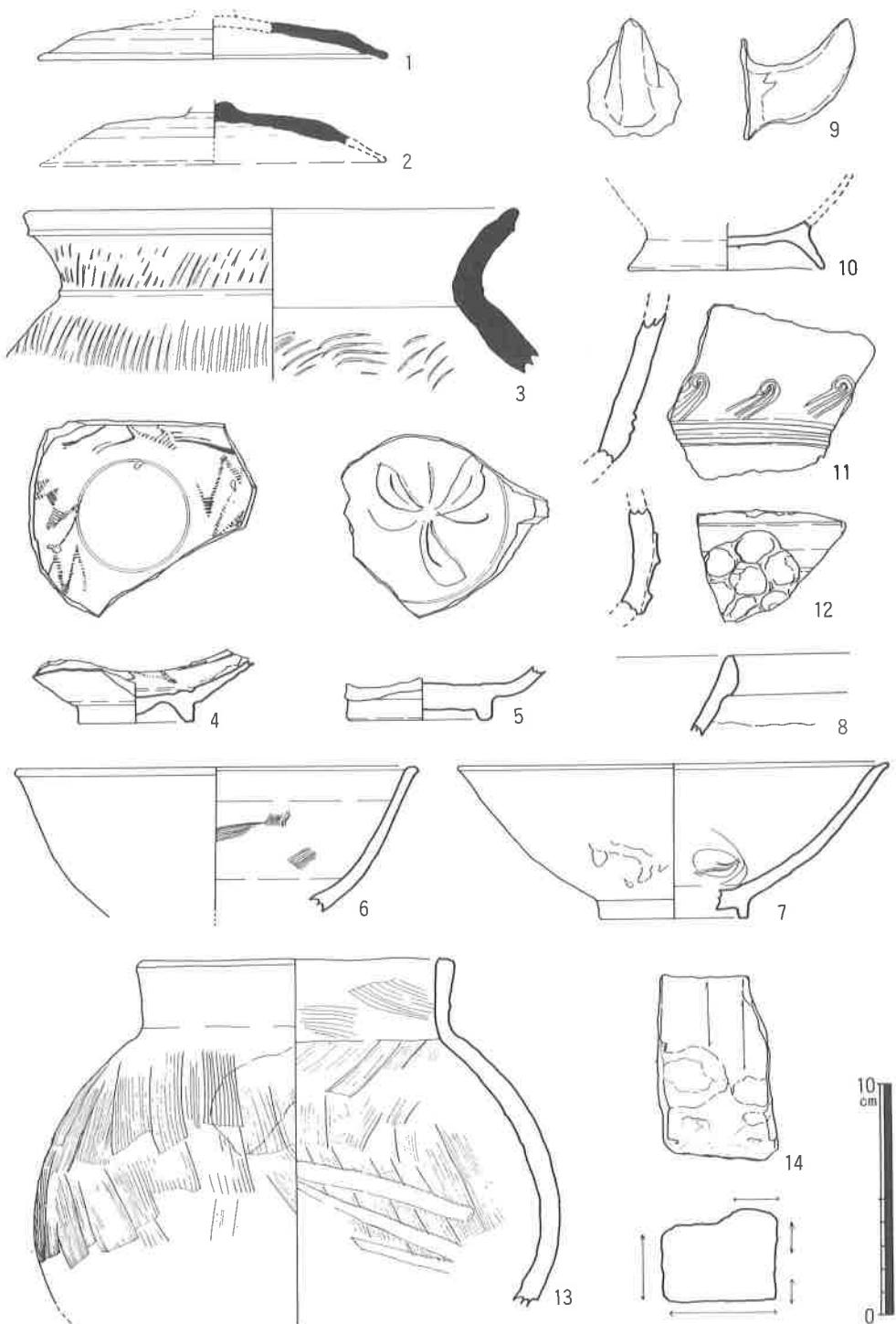


第29図 中央客土面出土土器 ($S = 1/3$)

1は、須恵器蓋口縁部片であり、扁平紐の付くものであろう。体部はヘラ削り、口縁部は横ナデを施し、端部は丸く仕上げている。口径15.2cm、現高1.6cmを測り、色調は灰白色、焼成は良好である。2も須恵器蓋であり口縁部を欠損する。扁平紐を付し、体部にヘラ削りを施す。色調は青灰色で、焼成は良好である。3は、須恵器甕である。丸味を持つ体部から「く」の字に外反する口縁へと続く。体部との境と屈曲部には小さ目の凸帯を持ち、口唇部は上外方へ丸くおさめている。又、口唇部下段にも小さい凸帯を付す。調整は、体部に縦方向のタタキ、口縁部はハケ目調整、口唇部には横ナデを施し、内面には青海波のあて具痕を残す。色調は、口縁部が暗茶色で、体部と口唇部が、自然袖をかぶっているため灰色を呈す。焼付は良好である。4～7は青磁、8は白磁器である。4は、高台の断面が台形に近く、底部中央部が突出する碗である。体部下半以下底部にかけて露体のままであるため、回転ヘラ削りの痕跡が良く残る。釉は黄色味がかった緑色を呈し、全体に薄くかけられ、又、内面に櫛歯による文様が描かれている。底径5.0cm、現高で2.5cmを測る。5は、高台の断面が四角に近く、底部内面に草花文を有する碗である。釉は灰色がかった緑色を呈し、全体に薄くかけられ、又、高台疊付及び高台内側は露体のままである。底径6.2cmを測る。6は、体部内面に櫛描花文を施す碗の口縁片で、釉は淡いオリーブ色を呈す。復元口径17.6cm、現高で6.4cmを測る。7は、櫛描花文を施す腕で、復元口径18.8cm、底径6.4cm、器高6.7cmを測る。釉は黄味系った灰白色を呈す。8は、玉縁口縁を有す白磁碗口縁片で、釉は黄白色に近い。9は、土師器甕もしくは瓶の把手であり、色調は暗褐色、胎土に白色微砂粒を多く含み、焼成はややあまい。10は、内黒土師器の高台付碗の底部片である。底径8.6cm、高台の高さは1.3cmで外に開く。内外面ナデを施し、色調は黄褐色、胎土に白石砂粒、金雲母を若干含み、焼成は良好である。11は、土師質の土器で、2条の凸帯を持ち、凸帶上に蕨状のスタンプ文を持つ。色調は暗赤褐色、白色微砂粒を多く含み、焼成は良好である。鉢の類であろうか。12は、須恵質の土器で、体部外面に花弁を貼り付け、真上に凹線が入る。色調はあづき色係った灰色を呈し、焼成は良好である。13は、弥生土器の壺である。丸味をもった体部に直に上る口縁を有す。内外面タテ方向のハケ調成を施し、口縁部は横ナデである。又、体部内面には棒状工具によるナデ付けの痕跡が残る。色調は黄褐色、焼成は良好である。弥生時代後期後半であろう。14は、砂岩製の砥石であり、赤味がかった乳白色を呈す。仕上砥に使える。9、10、13のみ青灰色粘質土出土である。

6) 包含層出土石器（第31図、図版－8）

1～3伴に丘陵西側に広がる青灰色粘質土中の出上である。1は現在長7.8cm、幅7.9cm、厚さ3.6cmを測る石斧片である。2は現長7.3cm、幅6.7cmを測り、背の部分から剥離した石斧片である。3は現長6.0cm、幅6.6cm、厚さ1.1cmを測るもので、表面は丁寧に磨き上げている。1～3伴に玄武岩製である。



第30図 包含層出土土器 ($S = 1/3$)

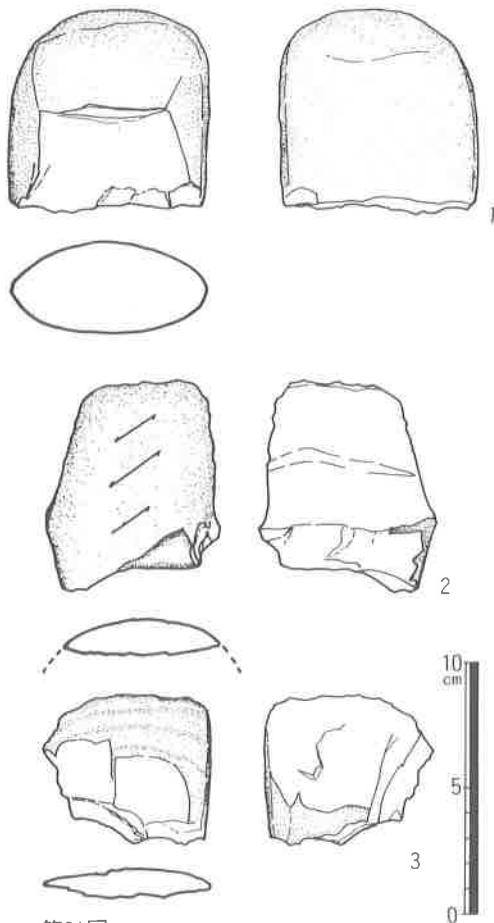
IV. おわりに

今回、報告分は、丘陵西側斜面の金江地区分で、遺構そのものの残りは決して良好とは言えない。調査区南測で検出した谷部肩のピット群の性格は不明であるものの、谷部中の土器、石器は弥生前期のみで、他の時代の遺物の混入を見ない事から単なる谷としてとらえるものではない。小郡市一ノ口遺跡に見られる道状遺構(弥生中期^{註-12})の可能性も考えられたが、明確な遺構が確認されなかつたため、谷状遺構として報告した次第である。谷状遺構中の出土遺物では、磨製穿孔具(砂岩製)や甕等の生活具は興味深く、丘陵上に居住区があった可能性は高い。この谷自体が丘陵上での居住区の南限としてとらえるべきものであろう。

次に調査区北測で検出した平安期の住居跡群であるが、立地的には必ずしも最適地とは言えず、近い時期での重複が激しい。住居の構造は、隅丸方形が主で、一辺450~650cm位の規模であり、竈等の付設のない簡単なものである。又、3号住居に関しては、2間×2間の堀立柱建物としてとらえてもよい。切り合いから見ても同時期には3軒若しくは4軒しか存在しておらず、集落と言うより、何らかな施設に付属するものと考えたい。

(参考文献)

- | | | | |
|-------------------------------|------|-----------------------------------|------|
| 註-1 「石崎・曲り田遺跡」 I
福岡県教育委員会 | 1983 | 註-8 原田大六著「福岡県石ヶ崎、支石墓を含む
む原始墓地」 | 1952 |
| 註-2 「三国の鼻遺跡II」
小郡市教育委員会 | 1986 | 註-9 鏡山 猛「原始箱式棺における姿相」
『史淵』 | 1941 |
| 註-3 「田村遺跡」 VI
福岡市教育委員会 | 1989 | 註-10 「三雲遺跡」 II
福岡県教育委員会 | 1981 |
| 註-4 「新町遺跡」 I
志摩町教育委員会 | 1987 | 註-11 福岡県遺跡等分布地図(糸島郡編) | 1981 |
| 註-5 「志登支石墓群」
文化財保護委員会 | 1956 | 註-12 「一ノ口遺跡」 I 地点
小郡市教育委員会 | 1991 |
| 註-6 「長野川流域の遺跡群」 I
前原町教育委員会 | 1988 | | |
| 註-7 「井原遺跡群」
前原町教育委員会 | 1991 | | |

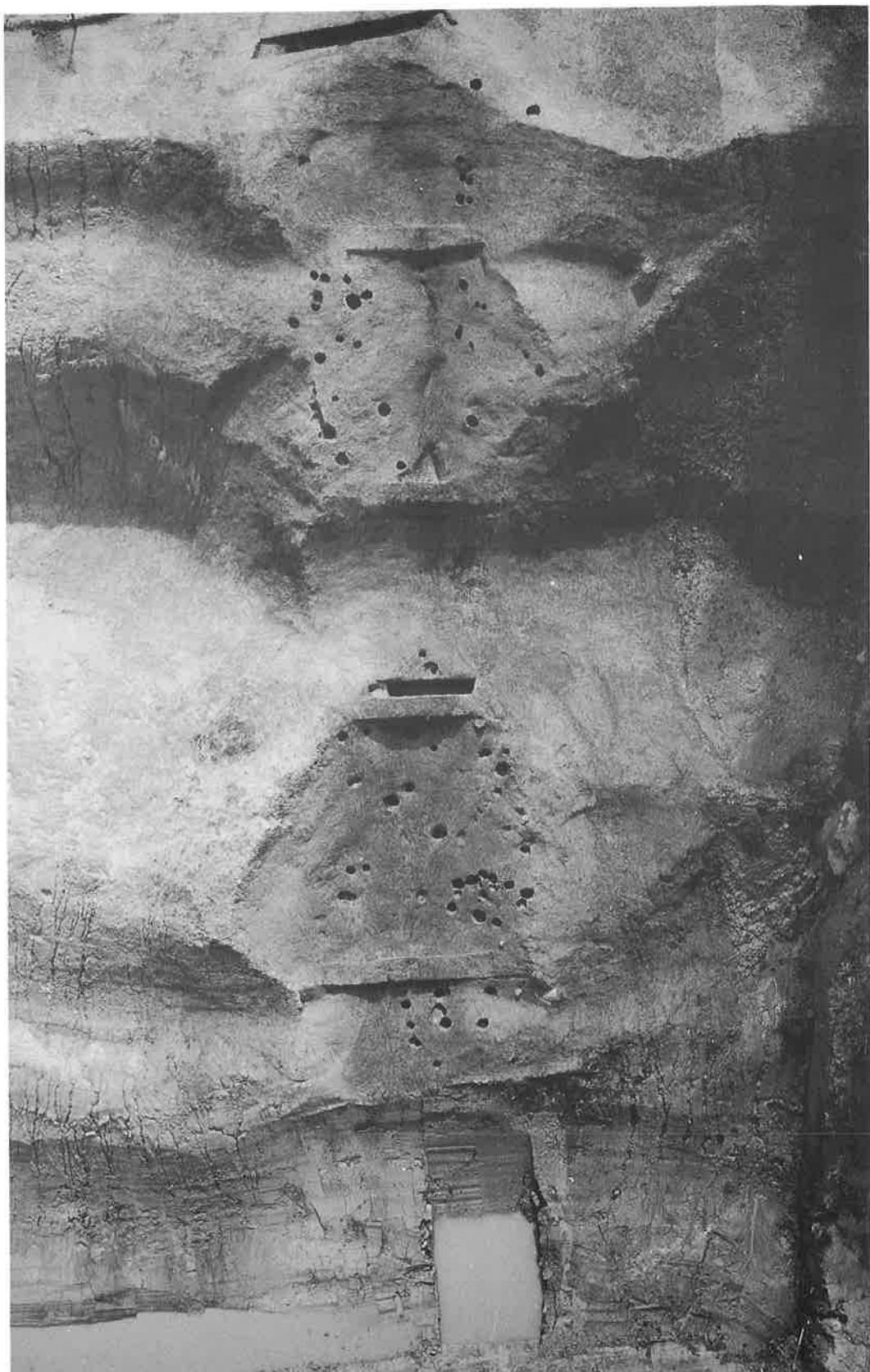


第31図
青灰色粘質土出土石器 (S = 1/2)

図 版



調査区全景(真上から)



谷状遺構全景(真上から)



(1)谷状遺構全景(西側から)



(2)石鏸出土ピット



(1)遺跡全景(北側より)



(2)住居群全景(真上から)



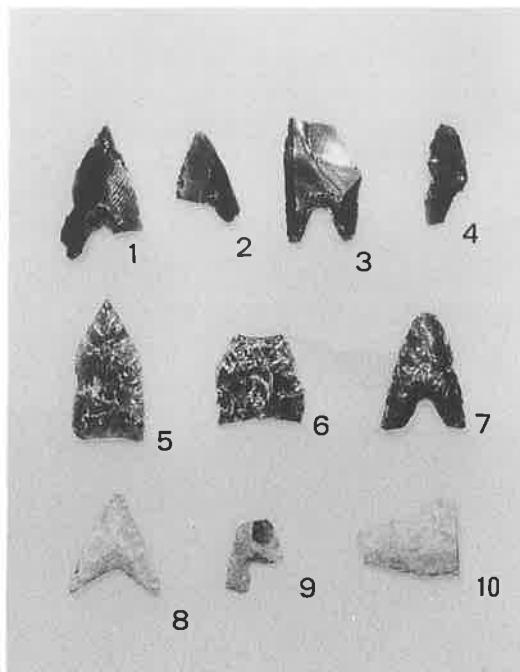
(1)1.2.3.4.5.6.10号住居跡



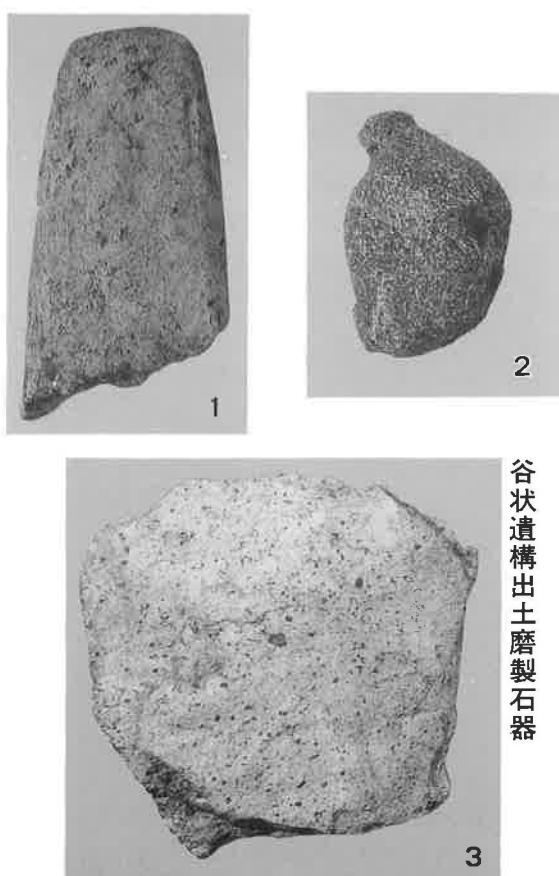
(2)4.5.6.7.8.9.10号住居跡



谷状遺構出土土器



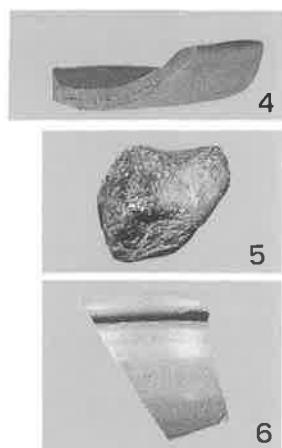
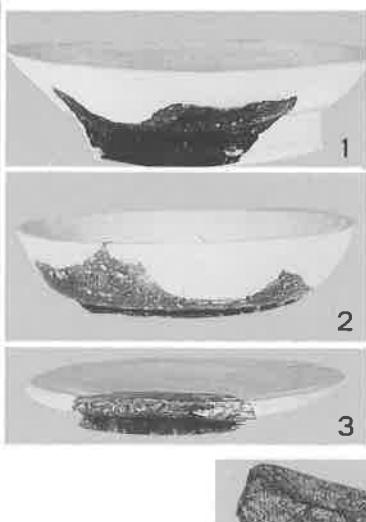
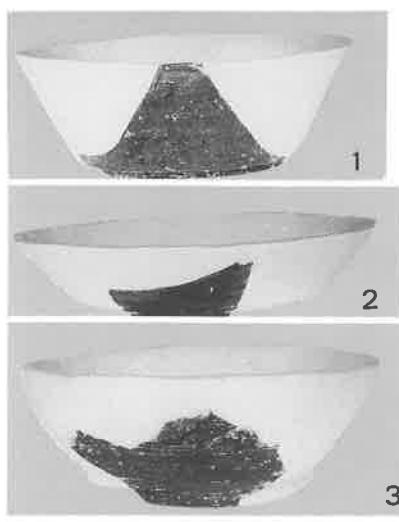
谷状遺構出土打製石器



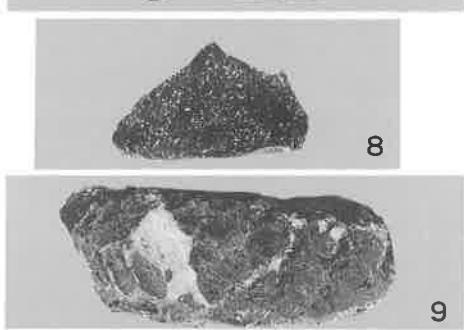
谷状遺構出土遺物

谷状遺構出土磨製石器

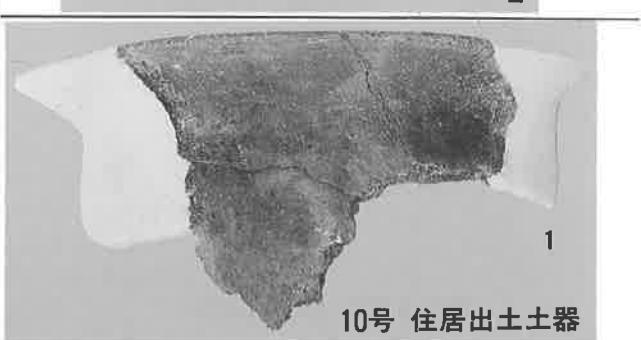
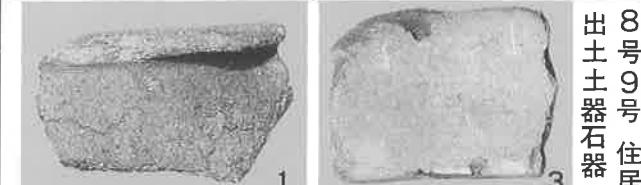
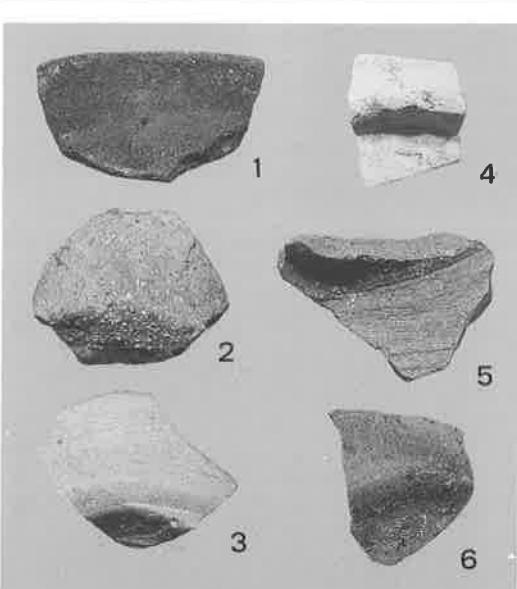
図版-7



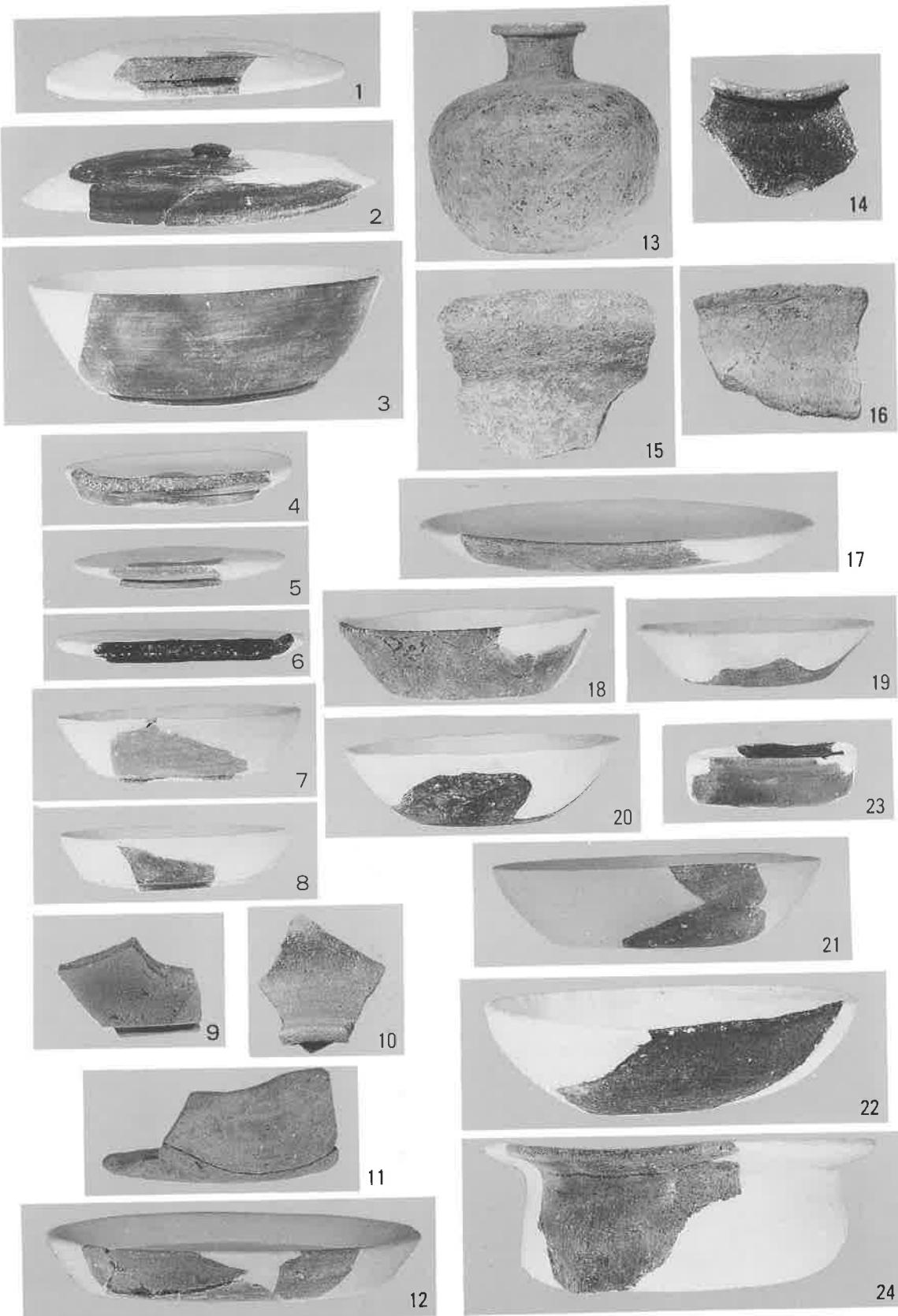
5号 住居出土土器



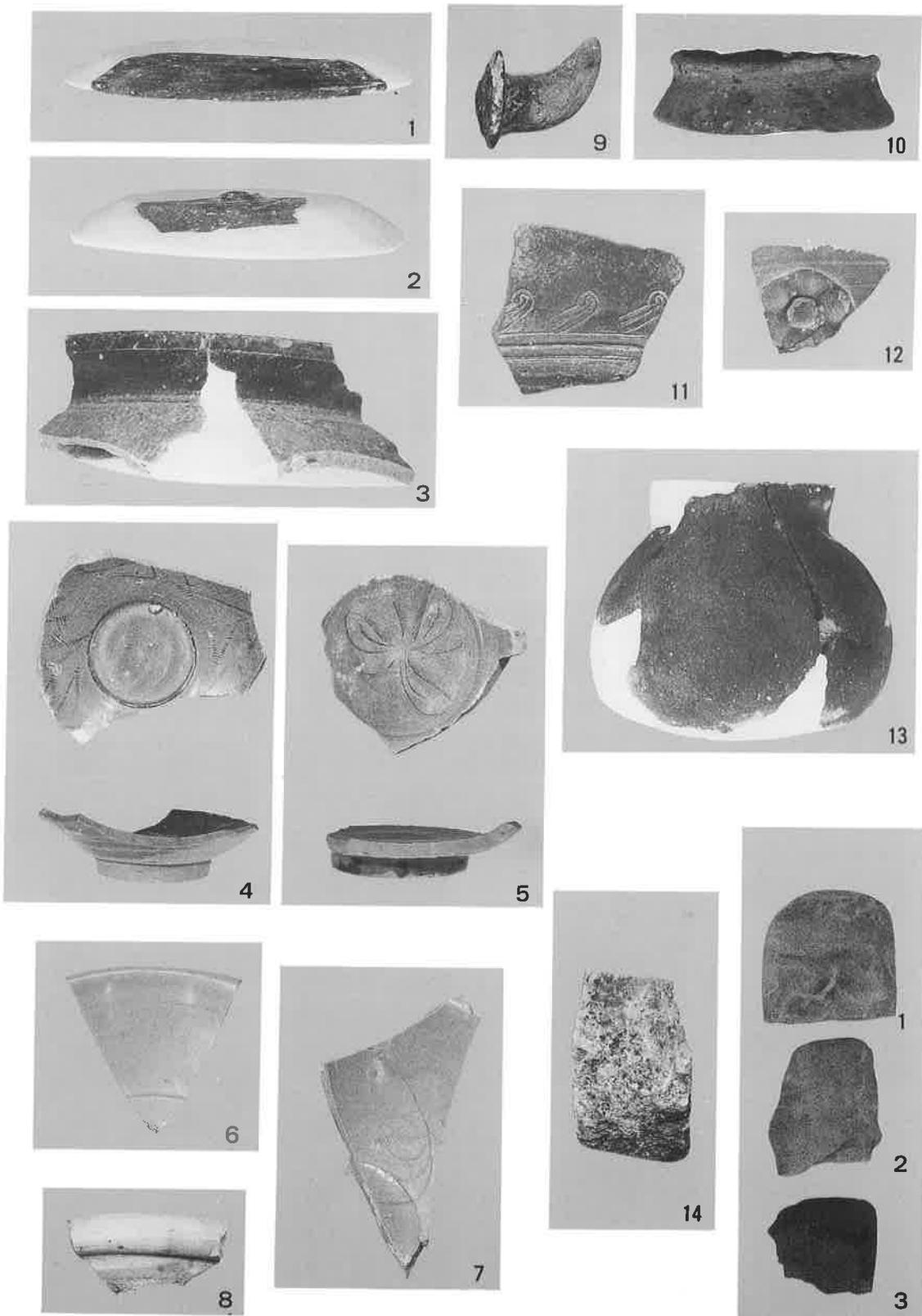
7号 住居出土土器



住居跡出土土器



中央客土面出土土器



包含層、青灰色粘質土出土土器

曲り田周辺遺跡Ⅱ

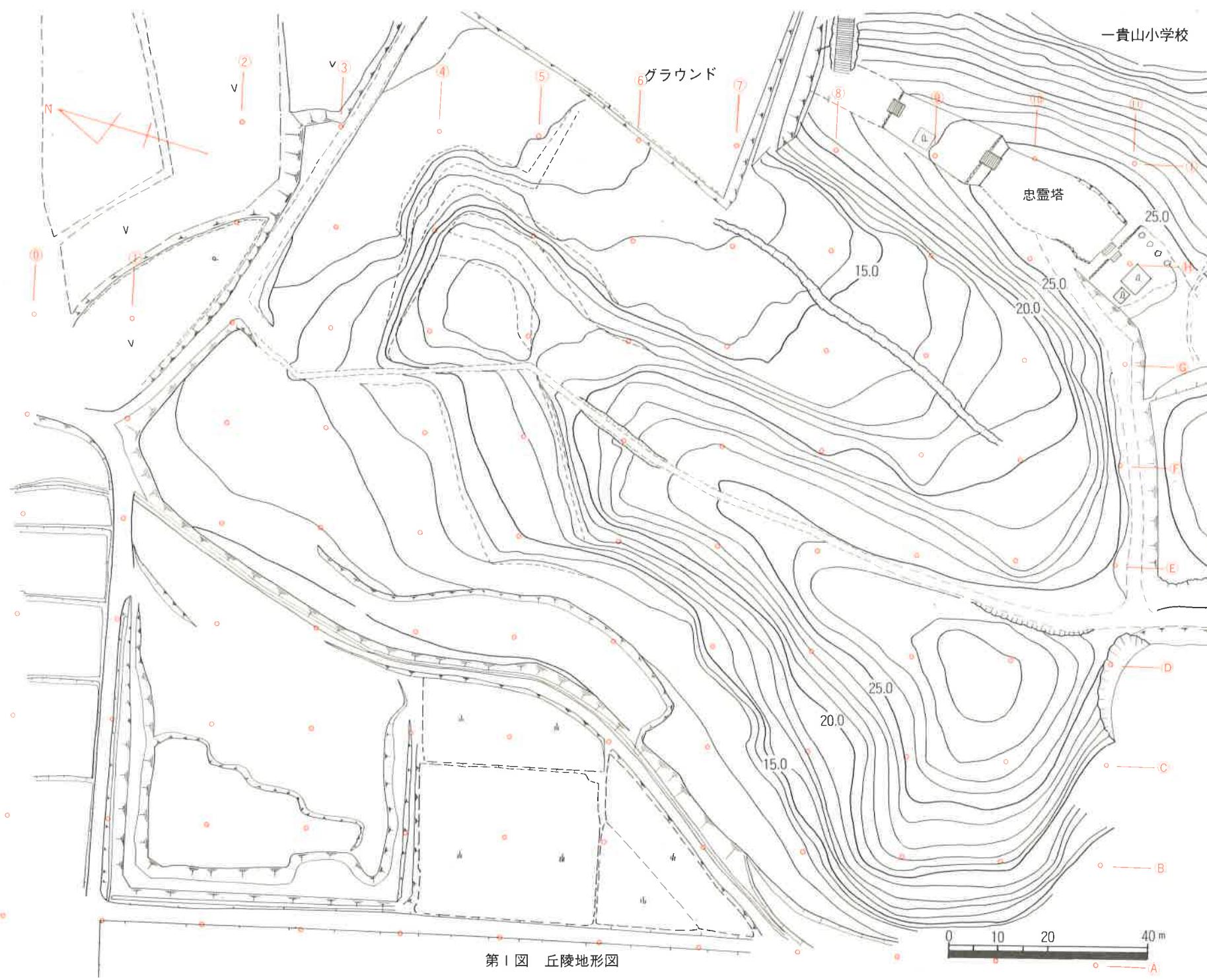
二丈町文化財調査報告書

第 5 集

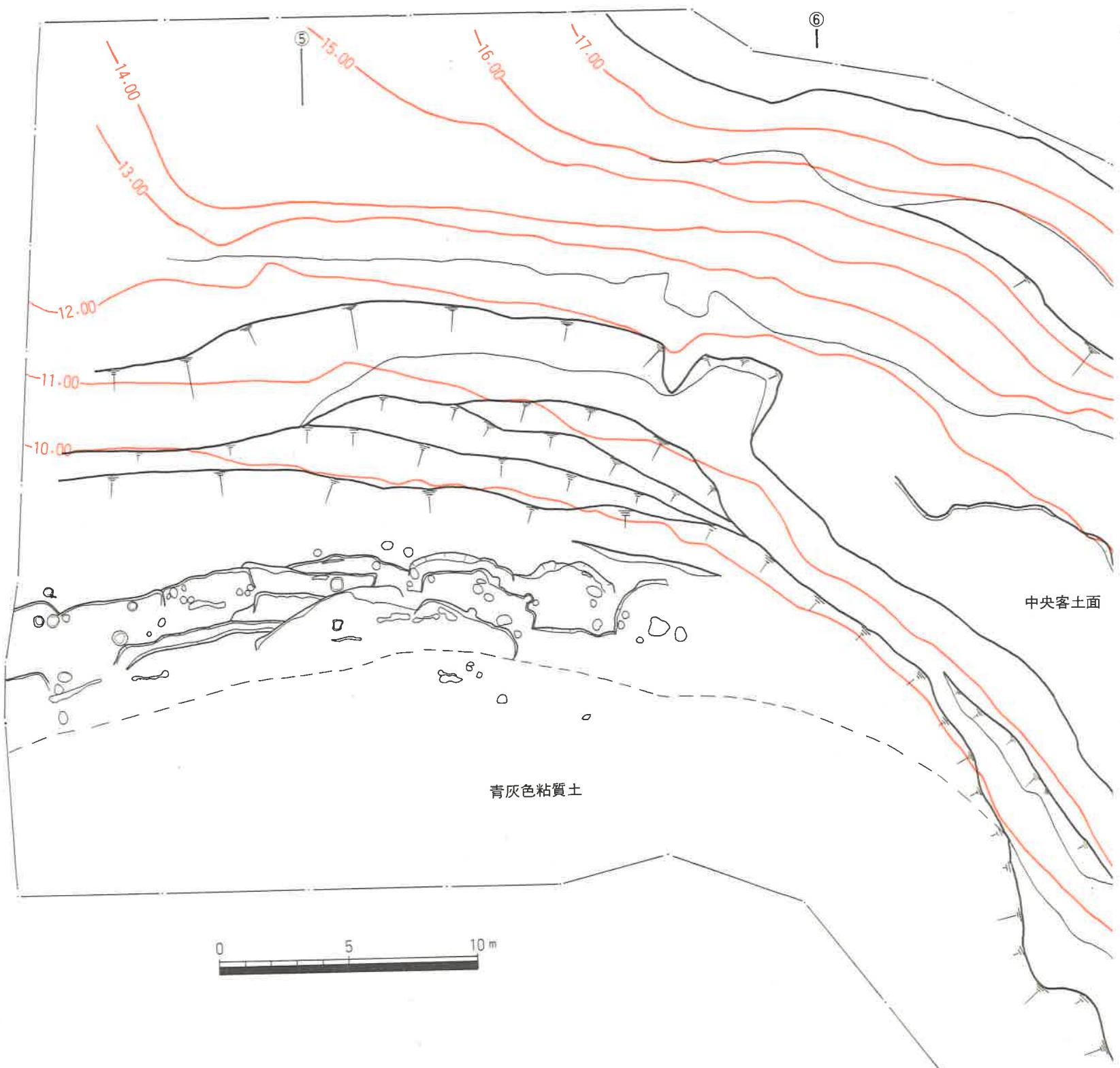
平成 4 年 3 月 31 日

発 行 二丈町教育委員会
福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地

印 刷 (有)松古堂印刷
福岡市西区周船寺1-7-64



第1図 丘陵地形図



付図 遺構配置図 (S=1/200)

